

出逢いは五年前の夏のことでした。我が家に、カンボジアの青年が、礼儀正しく手を合わせて入って来ました。

我が家は五人家族。十二年前、私は三人目を自宅出産し、子どもたちは生命の息吹に感動しながら、すくすくと育っていきました。そして、それからもずっとその心を大切に育つはずでした。それが、二年後、第一子が三年生の時、いじめから学校へ行けなくなり、我が家は一変しました。

全てが、社会から取り残され、周りと対立しているような、そんな気がする毎日を送っていました。そこで私は、たまたま職場の友人から頼まれた、アジアの青年を受け入れる、ホストファミリーをすることにしました。外へ行きづらい私の子どもたちは、拒否している訳ではなく、人をウェルカムで受け入れるチャンスを与えてはどうか？ と思ったからです。

それからは、インドネシア、中国、ミャンマー、ラオス、フィリピン、カンボジアの青年の方たちの短期ホームステイ、また、ラトビアからは、十ヶ月の高校生の滞在の受け入れもしました。その中で、子どもたちは、大人よりもたくましく、ごく自然に“おもてなし”をし、遊びの中から共通点を見つけて、どどん人との関係をむすぶ“いろは”を身につけていったと思います。その長男も今年大学生。また、長男のいけない姿を見て育つた三番目の次男は、六年間の長い保育所生活の後、小学校の六年間をほとんど、放課後登校、つまり朝から学校へ行けてない状態で、今春小学校を卒業します。でも、二人とも、笑顔一杯です。

さて、ホームステイの方々はどの方も、この日本の不登校児を決して特別視せず、ありのままを受け入れ、温かく見守ってくださいました。中でも、特に心を通わせ、今でも交信し続けているのが、カンボジアの方でした。

彼が来日した頃は、長男が中一、長女が小六、次男が小一でした。長男は中学に入って登校しかけていましたが、また嫌がらせの芽が出ていた頃、次男は働く母のために辛抱して保育所へ行き、入学したものの、保育所の延長で一クラスのままの移行。環境を変えられずに、入学後から行きづらくなり、そんな中で家では不穏になり、暴れたり、ごねたり、ありとあらゆる手段で自己アピールをしていました。その中に、カンボジアのダラさんが

笑顔でやって来たのです。

他の方と同様に、ごく庶民的な料理を作り、地元の街を案内しました。ちょうどこの時は、和歌山マリーナシティという所で、動物のふれあいの催しがあったので、子どもたちも楽しめるかと思い、出掛けました。こうして家族で出掛けても、その時の次男の心はとても病んでいて、つまらないことにも腹を立て、うずくまって動かなくなったり、事あるごとに、兄弟や私を困らせました。とうとう、帰る時に、私も叱りながら車に彼を乗せたことを覚えています。

その時です。それまで私たちファミリーと黙って同行していたダラさんは、車の中で次男の横に座り、じっと横で寄り添ってくれていました。次男もそれを受け入れ、車が家に着く頃には、二人で行動できるまでになっていました。

二日目は、いろいろと悩みました。暑いので、混み合う遠方は避け、近くの町民プールへ行くことにしました。ダラさんの水着も用意し、肌を出すこと、プールに入ることは出来るかを確認して、次男の好きなプールへ連れて行きました。大成功でした。ダラさんも楽しめたようでした。水の中は、自然と肌の触れ合いが生まれ、出来ること、出来ないことがはっきりしています。恐くなったなら大人について来ます。ダラさんと思う存分遊んだことは、彼の心の中に残っていたと思います。

「寄り添う心」のプレゼントを頂き、お別れしました。その後、メールのやりとりを続け、早5年余りが経ちました。その間、ダラさんが二度来日しました。彼はカンボジアのスポーツ教育省に勤めている公務員なのです。来日の時、次男と一緒に東京へ会いに行きましたが、その変わらない笑顔と、次男と付き合ってくれる根気強さに、またまた感動しました。そして、とうとう私は、昨年念願のカンボジアへ行くことが出来ました。

一人旅ではなく、「海外青年協力隊を訪ねる旅」というツアーに参加できたのです。協力隊の青年たちの話を聞いたり、活動ぶりを見学させていただいたり、地元の方々と触れ合ったりできましたし、ダラさんとも再会を果たすことが出来ました。私は、「カンボジアは私の第二の故郷で、カンボジアのおかげで自分の人生に大きな舵を切ることが出来た、そんな存在だなあ」と感じました。

私は理学療法士として、二十五年余り、子育てをしながら仕事をしてきました。もしも私に、お役に立てることがあるとすれば、リハビリ部門での支援、働くお母さんの支援、子どもたちの教育やスポーツの支援などをさせて頂きたいと思っています。夢はいっぱい広がりますが、私は聞くことよりも、現地に行き、現地の方々と出会ったことで、少しず

つ具体的に何が必要なのかが見えてきたような気がします。小さな、人々とのつながりの中で、生活弱者と呼ばれる障害者、高齢者、お母さんと子どもを守る活動を広げていけたらと思っています。

カンボジアの平均年齢は、まだまだ若いです。どうか、心のある育ちをして、“平和で笑顔の国”と呼ばれる故郷になってほしいと、切に願っております。